

美術館が開館して約20年がたち、この間に平成生れの若者が入社してくるようになりました。初期のジブリ作品を映画館で観ていないスタッフも少なくありません。映画館の座席も予約するのが当たり前。「もののけ姫」制作のドキュメント映像「もののけ姫はこうして生まれた。」(ウォルト・ディズニー・ジャパン)を見ての感想は、映画を観るための長蛇の列に驚いたとのこと。物心ついた時からスマートフォンがある世代からすると、まさかの光景だったのだと思います。

この夏は、ジブリの長編映画4作品のリバイバル上映が行われました。上映後「絵コンテ」や「フィルムコミック」などの問い合わせが多くあり、図書室でも目に見える反響がありました。じっくりと本を手にする若者の姿をよく見かけた夏でしたが、作品は知っていても実際に観たことがなかったのか、映画館の大画面で観て改めて興味がわいたのか、気になるところです。



季刊トライホークス 2020年 | 61号
発行日……2020年11月5日 | 発行人……中島清文
発行所……徳間記念アニメーション文化財団
東京都三鷹市下連雀1-1-83 三鷹の森ジブリ美術館
編集……石光紀子 机ちひろ | デザイン……川島弘世
印刷……図書印刷株式会社 | 非売品

本棚より

トライホークスに置かれているおすすめの本を紹介していきます。
トライホークスの本棚の中の一冊から、みなさんの本棚の一冊にさせていただいたら嬉しいです。

恐竜博士のめまぐるしくも愉快的日常

爬虫類、鳥類の化石を専門とする古生物学者であり、国立科学博物館に勤務されている恐竜博士こと、真鍋真さん。この本では、真鍋さん自身の恐竜との出会いから「恐竜学者」になるまで、そして恐竜学者や博物館の仕事についてが紹介されています。数億年、数千万年という時間を超えて、わずかな手がかりから、かつて生きていた「恐竜」を想像し、身体、動作、食べているものなど、たくさんの謎をひとつずつ解明していく。そして、博物館という場所で、それらを伝えていく。真鍋さんにとっての日常は、私たちが普段見ることのできないお仕事の裏側です。

美術館の常設展示室「少年の部屋」には、2001年の開館当初から翼竜であるプテラノドンの模型を飾っています。恐竜の色について、その一部がわかるようになったのは2009年以降で、それ以前はわからないというのが常識だったそうです。美術館のプテラノドンは、宮崎駿監督が当時の情報を元に推測し、色や形に関する細かい指定をして作られました。どんな色で制作されたのかは、ぜひ実物をご覧くださいと思います。

「恐竜」の存在が知られるようになったのは19世紀。当時の人はどれだけ驚いたことでしょうか。真鍋さんのお仕事を通して、未知の世界、想像することの面白さに触れることができると思います。



恐竜博士のめまぐるしくも愉快的日常

著者…真鍋 真
絵・漫画…かわさきしゅんいち
ブックマン社 1,500円



撮影…杉山知隆

原田 勝

Masaru Harada

幼いころ、 夢中になって読んだ本

多くの訳書を持つ原田勝さんは、宮崎駿監督が装丁画を描くほど好きなロバート・ウェストール作品の翻訳も手がけています。コラムなどでお見かけする原田さんおすすめの本は、図書館で紹介している本と重なるため、親近感を覚えていました。今回ご紹介いただいたのは、子どもの頃ご両親に買ってもらったという“世界の文学全集”からの作品です。装丁が豪華でしおり紐に金糸が編み込まれている書籍なので、子ども心にもキラキラと見えて宝物だったのではと思います。

* * * * *

わたしは神奈川県平塚市で育ったのですが、ありがたいことに、わが家の縁側からその屋根が見えるほど近くに市立図書館がありました。この図書館にはずいぶんお世話になり、江戸川乱歩やルパン、ホームズはここで知りましたが、今思うと、蔵書は限られていたように思います。

そんなころ、両親が、当時各出版社が競うように刊行していた子どもむけの世界文学全集の購入を決めました。河出書房の「少年少女世界の文学」という全集です。毎月の配本がとても楽しみで、好きな巻は何度も読みかえました。とくに好きだった一冊が『小公子・小公女』の巻です。この原稿を書くにあたって、ウェブ上であれこれ調べてみると、懐かしい表紙の模様や挿絵の画像が出てきて、少し記憶が蘇りました。あのコンパスや鳥のデザインを、広告の裏やノートの端に真似して描いていましたっけ。

この巻もそうですが、一卷に二作、三作収められているものもあり、抄訳だったのでしょうが、それがかえってストーリーをきわだたせ、先が気になって、夜、布団に入ってから、薄暗い豆球の明かりで読んで親に叱られたことをおぼえています。おかげであっという間に近視になってしまいました。全集は合わせて二十数巻あったはずで、思えば、この時の外国文学の読書体験が、こうして今、子どもの本の翻訳に携わるベースになっているのでしょう。

『小公女』の物語設定は、ロンドンの寄宿学校に入っていた主人公セーラ（英語の発音は「セアラ」が

近い）が、父親の死と事業の失敗のせいで、たちまち、お情けで屋根裏部屋においてもらう使用人の身となってしてしまうという、いわゆる「孤児もの」です。でも、健気なセーラは、ミンチン先生（世界中のミンチン姓の人たちは、この物語のせいでどれだけうらまれるんだろうかと心配になるほどいやな女性）にいくらこきつかわれても、まるで公女様のような態度をくずさず、やがて父親の友人に見つけられて引きとられるまで、この生活に耐えるのでした。

この設定だけでも、もうたまりませんが、作品の一番の肝は、セーラの想像力にあります。小学生だったわたしは、セーラの寝起きする屋根裏部屋がうらやましくてしかたありませんでした。スズメやネズミに話しかけ、実際には冷たい暖炉に暖かい薪の火がおどり、なにもないテーブルの上にはおいしい食事がならんでいる「つもり」になる。そしてある日、その「つもり」遊びがほんとうになるのです。ああ、天窓から出入りするラム・ダスになりたいと何度思ったことか！

そして、まわりには、境遇が変わってしまったセーラの人柄を変わず慕う、アーメンガードやロッチェ、ベッキーの存在があります。子どもながらに、自分はミンチン先生のように、人を貧富や身分で判断するのではなく、彼女たちのように、人柄や品位で判断する人間になりたいと思ったものです。

また、挿絵がすばらしかった。『小公子』の挿絵はいわさきちひろで、無邪気で明るい印象があるのに対して、かたや『小公女』の挿絵は駒宮録郎、ち

よっと暗い感じの、でもとても美しいカラーの絵で、想像力をかきたてられました。装幀もふくめて存在感のある全集で、「物としての書籍」の価値を、知らず知らずのうちに刷りこまれていたようにも思います。

翻訳について少し。イギリスでこの作品の原型が雑誌に連載されはじめたのが1887年、本として最初に出版されたのは1905年だそうです。数年前に原書を少し読んでみたことがあります。英語は平易で読みやすいものでした。最初に翻訳しはじめたのは若松賤子で（1893年から雑誌に連載）、すでに同じバーネット作の『小公子』（原題“Little Lord Fauntleroy”）を翻訳していた彼女が、当初『セイラ・クルーの話』（原題“A Little Princess”）としていたこの作品を、のちに『小公女』と改題し、それが今も多くの翻訳版のタイトルとして受けつがれています。これは絶妙なタイトルで、「小さな女王」ではなにかがちがうし、セーラの毅然とした態度は、今と違っては「小公女」としか形容のしようがありません。

翻訳は、その後、菊池寛、伊藤整、川端康成といった文豪が手がけ、著作権の切れた現在では、数えきれないほどたくさんの方が翻訳しています。今わたしの手元にあるのは、角川文庫の川端康成・野上彰訳。初版が昭和33年とあるので、おそらく河出書房の全集も、これがベースになっていたと思われます。そのほかにわたしが読んだことのあるのは、2011年の福音館書店版、高樓方子訳。この両者の

翻訳を比べてみたことがあるのですが、高樓訳は、意外にも川端・野上訳よりも硬質で、漢字や漢語も多く、また、使用人のベッキーの言葉遣いには身方や出自を意識した日本語をあてています。むしろ川端・野上訳のほうが、読者である子どもたちを意識したやわらかな日本語になっているのです。もちろん、やや古いと感じられる言いまわしもありますが、それが巧まずして百年前のロンドンという時代感を絶妙に表現しているのです。評価の基準はさまざまあり、甲乙つけがたいのですが、わたしは、自分の子ども時代の幸せな読書の記憶もあいまって、川端・野上訳が好きです。

時代設定は古くなっていきますが、物語を通して描かれるセーラの想像力の力は、これから多くの子どもたちを勇気づけてくれることでしょう。

ほらだまじる

1957年神奈川県生まれ。東京外国語大学卒。主に英語圏の児童書・ヤングアダルト文学の翻訳に携わる。訳書に『弟の戦争』（徳間書店）、『サブリエル』ほか「古王国記」シリーズ（主婦の友社）、『スピリットベアにふれた鳥』（鈴木出版）、『ブライアーヒルの秘密の馬』（小峰書店）、『夜のあいだに』（ゴブリン書房）、『キャバとゲルダ』（あすなる書房）、『セント・キルダの子』（岩波書店）など。

トライ ホークス の本

ウェストール短編集

真夜中の電話

著者…ロバート・ウェストール

訳者…原田 勝

徳間書店 1600円



[…… 夢中になって読んだ本 ……]



『小公女』

著者…フランシス・ホジソン・バーネット

訳者…川端康成 絵…駒宮録郎

河出書房少年少女世界の文学9

『小公子・小公女』所収

- ◆『だれも知らない小さな国』◆『ツバメ号とアマゾン号』
- ◆『怪人二十面相』など、少年探偵団・怪人二十面相もの
- ◆『怪盗ルパン』など、ルパンもの ◆『緋色の研究』など、ホームズもの
- ◆『十五少年漂流記』◆『ノンちゃん雲に乗る』
- ◆『赤毛のアン』◆『床下の小人たち』

下記の書籍は、原田さんの挙げた本のタイトルをもとに、現在出版されている本の中から編集部が選びました



1



2



3



4

① 小公女

著者…フランシス・ホジソン・バーネット 訳者…高樓方子
福音館書店 2300円

② コロボックル物語! だれも知らない小さな国

著者…佐藤さとる 絵…村上勉 講談社 1500円

③ ツバメ号とアマゾン号 上下

著者…アーサー・ランサム 訳者…神宮輝夫
岩波少年文庫 上 760円/下 800円

④ ノンちゃん雲に乗る

著者…石井桃子 絵…中川宗弥 福音館書店 1200円

- ◆怪人二十面相 文庫版 少年探偵 著者…江戸川乱歩 ポプラ社 660円 ◆奇岩城 アルセーヌ・ルパン全集4 著者…モーリス・ルブラン 訳者…長島良三 偕成社 1400円 ◆緋色の研究 著者…コナン・ドイル 訳者…延原謙 新潮社 460円 ◆二年間の休暇 上下 著者…ジュール・ベルヌ 訳者…朝倉剛 福音館書店 上 700円/下 650円 ◆赤毛のアン 赤毛のアン・シリーズ1ー 著者…ルーシー・モード・モンゴメリ 訳者…村岡花子 新潮社 750円 ◆床下の小人たち 著者…メアリー・ノートン 訳者…林容吉 岩波少年文庫 680円

〔連載……第2回〕清水真砂子さんと読む『ゲド戦記』

読むとは追体験すること

さて、誰にも寄りかからず生きてみたいと願って手にしたはずの公立高校教員の職を捨て、誰にも追い立ててくらすられるようにと、退職の前年ローンを組んで手に入れた小さな私自身の家にこもり、さらなる原書の読みに入ったものの、まずぶつかったのは Ged の読み方、その表記の問題だった。そんなこと?! と読者の皆さんは思われるかもしれないが、当時英語圏の書評誌でも、この名をめぐる議論がおり、God を連想する声まであがっていた。物語に登場する植物にも、大いに悩まされた。実在のものか、それとも作者の創造によるものか、わからないのである。こんな時のために植物図鑑があるのに、それに今ではウィキペディアだって、と言われそうだけれど、私は情報をたぐりよせる術にいつも疎い。そうだ、忘れないうちにせめて本紙の読者の方には謝って訂正しておかなくては。オジオンは本来オギオン（松かさ）と表記すべきだった。

第2巻『こわれた腕環』(The Tombs of Atuan)には早々にマヤ文明を想起させる神殿が登場する。ああ、でも忘れないうちに。私はあのプロローグの冒頭に描かれる場面が大好きである。以来りんごの木を見るたびに、この場面を思い出す。幼いテナーの声とともに。

いや、話を戻そう。著名な文化人類学者を父にもつ作者にしたら、それは空気のようなものだったにちがいない。でも私には石の重さも、あの暗さもわからない。1975年秋、ついに私は決意し、なげなしの金をはたいてメキシコに飛んだ。

作者に直に質問することは? そんな畏れ多いことがどうしてできよう。私は訳者とはいえ、彼女にとっては広い太平洋のむこうに暮らす、全く無名の一読者でしかないのだ。実際ル＝グウィンをとりまく関係者の壁の厚さも2度3度と思い知らされ、ようやく私が矢も盾もたまず、直にル＝グウィンに手紙を書いたのは、第4巻『帰還』を訳了、勤務先の短大から1年の研修休暇をいただいてロンドンに飛んだあとのことである。この辺のいきさつについては後に書くことにして、話を元に戻そう。

さて、メキシコには飛んだものの、めざす植物図鑑は首都最大と紹介された書店でも、「まだできておりません」と言われた。が、うれしかったのは、『ゲド戦記』

第2巻の神殿の配置図とそっくりのものを文化人類学博物館の、とある壁に見つけたことと、“玄室”なるものを、閉館時刻の迫る、誰もいない薄暗い地下に訪ねたことだった。

メキシコ行きには、もうひとつ求めていたものがあった。それは『こわれた腕環』第1章冒頭の場面、主人公の幼い女兒が玉座のある神殿の大理石の石段をのぼることが、どれほどの負担をこの女兒にかけるかを直に己の身体に感じとることだった。具体的にいえば、せめて石段の蹴上がりの高さを自らの身体に感じたい。それなくしては、第2巻の翻訳は始められないと思ったのである。一介の旅人にできることはその種の石段を自らのぼり、その負担を己の身体に刻むことしかない。私はティオティワカンの遺跡を訪ね、その石段をのぼった。そして、そこからあの神殿を、少女が背負ったあの闇の深さを自らの身体に刻もうとした。

そうそう、読者の皆さんは、これもとうに気づいておられるであろう。アースシーには道具はあっても、機械はなく、まして電子工学など全く無縁な世界であることに。となると、そこで使われる言葉は、そのリズムは、スピードはいかなるものとなるのか。この問題に気付かせてくれたのは第2巻の翻訳の作業に入る少し前、ほんの3、4日の集中講義にでかけた都内のある音楽大学で、たまたま昼食を共にした先生のお話だった。その先生はバッハの時代、人々は日々の暮らしの中でどんな音をその耳にしていたか、どんな時間の流れの中に身を置いていたかに深い関心を寄せておられたのである。また別の日、別の大学に招かれて翻訳の話をした時、終わるや演壇に駆け寄ってきて、「翻訳って演出そっくりですね。」と同志に出会ったように声をかけてきてくださったのは、その大学で演劇を指導してこられたという先生だった。

(児童文学者・翻訳家
清水真砂子)



こわれた腕環 ゲド戦記2
著者…
アーシュラ・K.ル＝グウィン
訳者…清水真砂子
岩波少年文庫 680円